



## 幼児の知能テストについて ②

小 口 忠 彦

もし、現在よりもずっと立派な知能テストができ、子どもの知能の程度が正確に測定されたと仮定しても、実は、われわれが予想しているほど指導法が進むものではない、ということ、それから、現在の知能テストは、はじめにつくられてはいるが、検討してみると、まだじゅうぶんしっかりしたものではなく、ただ結果の数字だけで、この子どもの知能はこれだけ、といい切るわけにはいかないから、知能テストもよいが、それだけにたよらないで、日常の行動を観察して、これを知能テストの結果と結びつけるとよい、ということ、前回述べた。

日常の観察が、なぜ必要かということについて、少しつけ加えておこう。幼稚園をおえ、小学校、中学校と、しだいに上級に進学し、大学時代になると、知能の程度と、学業成績との関連が、極めて少なくなる。つまり、知能の程度と、学業成績とのくいちがいは、

は、発達段階が進むにつれて大きくなるのである。現在、幼稚園では学業成績というようなものはないから、知能の程度との関係は調べられないけれども、発達段階が低くなるにつれ、知能程度と学業成績とのくいちがいが小さくなることから推して、幼稚園では、知能の程度と、毎日の生活でどのようにそれを活用しているかということ（戸をしめる、あと始末をするなどこういうことが小学校以上の段階での学業成績にあたる、といえる）との関連が密接になることは明らかである。幼児は、もって生れた知能を、割合生まの形であらわしている、といえる。だから、知能テストの結果と、とくに知能に関係のある行動を観察した結果とを相互にらみ合わすと、割合正確に知能の程度をしらべることができるのである。

つぎに、知能テストをやる場合の注意を述べよう。まず、ごく簡単に知能検査を分類すると、一般知能検査と特殊知能検査に分けら

れる。私たちが、日頃用いている知能テストは前者のほうであり、後者は職業適性を調べるテストである。次に、知能テストは、団体式知能検査と個別式知能検査とにわかれる。ここでまちがえてならないのは、団体式知能テストは、団体でなければやっていけないというのでなく、できるだけ個別でやってほしいが団体でもできるという点である。

次に、内容的にみると、団体式の場合にも個別式の場合にも、A式知能テスト、B式知能テスト、そして、C式はあまり使っていないが、C式といえるような知能テストとがある。

団体式知能テストの代表的なもの。A式は、田中A式知能テスト。B式は、田中B式知能テスト、とくに幼児のためにつくられたものとして、幼児用田中B式知能テスト。C式はない。

個別式知能テストの代表的なもの。A式は、鈴木治太郎氏の鈴木ビネー法知能テスト。田中ビネー法知能テスト。B式のものには、人物画をかかせてみる知能テストなどもあるが、現在のところでは、代表的のものとはまではいえない。C式といってよいものに、牛島義友氏乳幼児精神発達検査、略して乳幼児簡易検査とよばれるテストと、WISC<sup>ウイスク</sup>知能診断テストとがある。(WUE<sup>ウエクスラー</sup>テスト)。IIT<sup>アインテリジェンス</sup>。S<sup>スケール</sup>。C<sup>チャイルド</sup>。つまり、子どもに適用するためにつくったウエクスラー氏の標準知能テスト。)鈴木ビネー法は、二歳ぐらいから適用できるから幼稚園でもつか

える。田中ビネー法も同じ。牛島氏の乳幼児簡易検査は、零歳より七歳ぐらいまでだから、むろん、幼稚園でもつかえる。WISCは、五歳より十五歳までだから、幼稚園児の一部には使用できる。

さて、A式でもB式でも、実際にテストするときは、なるべく個別式がよいのである。知能テストは、どのテストであろうと、標準化するときに、うまくない点が出てくる。例えば、都会と農村での子どもの扱い方、生活年令の四捨五入についてなど、こまかい点でめんどうなことがある。

団体式でも個別式でも、まずインストラクション(指示)に注意しなければならぬ。つまり、やり方を、手引書にかいてあるとおり子どもにつたえるのであるが、子どもだからといって答を教えってしまうほどいいでもないし、また、このくらい言ったらわかるだろう、といったぐあいに手をぬくのもよくない。また、手引書の内容を自分でかってに解釈して変えてしまうのもこまる。手引書どおり、忠実におこなう。それから、へたなインストラクションもさげなければならぬ。へんなアクセントでやると、同じハシでも、橋なのか、箸なのかはつきりしないようなことがおきる。これは、インストラクションとしての正確さがないというよりへたなのである。また、団体式の場合は、どの子にも、やり方がのみこめるように注意しなくてはいいけない。子ども同志でしゃべっていたり、横を向いていたりして、インストラクションがよくのみこ

めないことがあるが、先生の目がじゅうぶんに全部の子どもたちにいき届かないときは、先生が、いくら自分では正確にしたつもりでも、本当の子どもの知能はしらべられないのである。

テストには時間が定められている。三十秒とか、一分三十秒とか、この時間を正確にしなければならぬ。少しぐらいおまけしてもいいだろう、というようなやり方はいけない。また、こまかくみると、数を三―五―八とこちらでいって、そのとおりに子どもにいわせる反唱、または逆唱の場合など、ていねいなつもりで、あまりゆっくりと三―五―八というようにいって、答えにくい。手引書に、どのくらいの間隔でいったらいいか、が書いてあるから、ここまで注意しなければならぬ。

次に、テストを受けるときの、子どもの身体のごあい、怪我をしているときとか、風邪をひいて鼻がつまっているときなどは、不利になり易いから、身体のごあいについても、ひとりずつ全部にこまかく注意する。また、気もちにも注意する。今日は帰ってきたら本を買ってあげますよ、といわれていると、その子どもも気もちは、買ってもらう本の方へいってしまつて、テストの方がうかつになつてしまう。こういうことは、外部からみてもわからないが、いつもと同じような自然の気もちでテストを受けているかどうか、注意しなければならぬ。それから、人に見せたり、人のを見たりする。これも困る。これは、団体式知能テストの宿命的な欠点になつてい

る。個別でやる場合、とくに注意しなければならないのは、子どもを妙に改まった気持に追いこんではいけないことである。中学生や高校生ならば、かえつて有利になることもあるだろうが、幼児の場合、おどおどしたり、ひねくれたりして、日頃の自然のものが現れないから、改まった気持をおこさせないようにすることが大せつである。幼児用のテスト用紙には、色刷りのきれいなものがあるが、とくに小さい子どものため、幾分でも興味を持ってやってくれるようにという心遣いが入っているのである。

さて、最後に、テストの結果をどう処理するかという問題である。子どもにA式の知能テストをやったとする。一度だけやつて、この子どもの知能はこの程度だと考えている先生は、問題外だが、A式をやつて、こんどは、B式をやつてみる。A式とB式の結果を見くらべると、きまつたことのように、くいちがいが出てくる。このくいちがいをどうみるかという問題である。

A式にはコトバがたくさん入っているが、B式には、コトバははいつていない。テストそのものの性質がちがっているのである。結論からいうと、まず無難なところとして、必ずA式・B式の両系統のものをやり、点のくいちがいが出たときは、両方の平均をとることである。C式には、A式半分とB式半分、といったぐあいに、両系統の問題が入っている。このC式のテストでは、A式とB式とを別々にやらなくても、同時に、両系統のテストをやつたような効果

があるようなくあいになっているわけだ。

しかし、解釈のしかたには、二通りある。一つは、WISCのよ  
うな解釈のしかた。すなわち、A式系統の見方と、B式系統（動作  
検査）の見方とを並列させて、知能を解釈する。この両系統を、別  
々に解釈するのである。全体を一本とみて、全検査IQを算出して  
も、両系統のくいちがいに對しては、別々に解釈する。二通りの知  
能があるように解釈するのである。つまり、両系統のテストのくい  
ちがいを、そのままに受けとって解釈すればいいから、くいちが  
いが出て、困りはしないのである。

だが、別の解釈のしかたもある。この第二の解釈では、知能を、  
あくまでも一つ（一通り）とみる。どちらの解釈が正しいか、につ  
いては、現在のところ、はっきりいうことはできないが、後者の解  
釈を採用する方がよいのではないかと思われる。発達のみにと、  
知能は、B式系統からA式系統へとすすみ、両系統の知能に区分す  
ることはできるのであるが、知能そのものは、やはり、一つだ、と  
思われるのである。知能テストからみると、A式とB式との二通り  
があった。そうして、やってみるとちがう点が出てくるのである。  
が、これは、知能が二通りある、ということではないように思われ  
る。やはり、峯は一つだと思う。のぼり方を工夫すれば、峯の一つ  
だということがはっきりしてくると思う。こういう意味で、両系統  
のテストの平均をみるのが正しいと思われる。最終の結論を出すこ

とはできないとしても、たとえば、鈴木ビネーと、幼児用田中B式  
とをやって平均をとり、それを、日頃の行動観察とにらみ合せて、  
この子どもの知能は大体このくらいだろう、というようにまとめる  
あたりが危険がないと思う。

試みにWISCで、こうしたくいちがいをどう処理しているか  
を、もう少しこまかくみると、こうである。A式系統の問題で良い  
点をとった場合、こういう子どもは、全体として見れば、知能は高  
いらしい。が、ややとするとおとなとばかり遊んだり話したりし  
ていて、同年輩の子どもと遊んでいないために、こうしたぐあいに  
知能がのびているのではないか。動作の方で、もう少し訓練しなけ  
ればならない。また、逆の場合。全体からみると、知能は高くなさ  
そうだが、手先を使ってやる仕事の方ではのびる見込みがあるの  
ではないか。こういうぐあいに診断してゆくのが特徴だから、く  
いちがいがでて、困りはしないのである。

テストの結果どおりに解釈したららくであるが、そのとおりに割  
切るとしたら、せつがちである。こういうテストも、研究的、試験  
的にやってみるのはよいが、何とかして、その子どもの知能の程度  
をつかまえないというときには、A・B両式の平均と観察とをにら  
み合せて見当をつけるのが適切だと思う。そうして、この程度にし  
かできないのが現段階なのだ、というように考えるのが、筋がとお  
っているとおもう。